



TITLE:

研究開発コロキウム(2007年度): 野 殿・童仙房地域における協働的な 「学びの空間」をめぐるフィール ドワーク

AUTHOR(S):

太田, 拓紀

CITATION:

太田, 拓紀. 研究開発コロキウム(2007年度): 野殿・童仙房地域における協働的な「学びの空間」をめぐるフィールドワーク. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 92-92

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179713>

RIGHT:

野殿・童仙房地域における協働的な「学びの空間」をめぐるフィールドワーク

研究代表者：

児玉 華奈（教育学研究科・生涯教育学・博士課程）

研究分担者：

太田 拓紀（教育学研究科・教育社会学・博士課程）

生駒 佳也（教育学研究科・専修コース・修士課程）

辻 喜代司（教育学研究科・専修コース・修士課程）

1. 研究目的

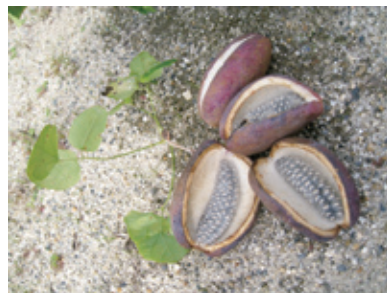
京都市内から電車を乗り継いで約2時間、さらに最寄りの無人駅から険しい山道を15分ほど車で駆けのぼると、突然のどかな山村地帯がひらけてくる。野殿・童仙房地域は三重県、滋賀県、奈良県に隣接し、京都府の最南端に位置する南山城村の二つの区である。標高約500メートルの高原地帯にあり、主産業はお茶である。野殿は明治以前から続く伝統的地区、童仙房は明治にひらかれた開拓村であって、それぞれ豊かな地域の特徴をもつ。

ここではいま、独自の地域性を生かしつつ、新たな学習空間を構築しようというプロジェクトが動きはじめている。一部の地域住民たちが中心となって、京都大学教育学研究科の生涯教育学講座、教育実践コラボレーション・センターと連携し、廃校となった旧・野殿童仙房小学校を活動拠点に、「学びの空間」づくりをはじめたのである。そして、彼らと連携する大学側としても、野殿・童仙房地域の実態を把握することなしに、有効な協働的实践を行うことはできないだろう。

本研究では、野殿・童仙房地域の歴史や民俗、「学びの空間」づくりに対する地域住民たちの意識に焦点をあて、両地域の地域的特性や住民の教育観を明らかにしたいと考えている。その成果は、今後の協働的な「学びの空間」づくりに向けた基礎資料となるはずである。さらに以上の研究を通じて、地域の課題を浮き彫りにし、その課題に京都大学が地域住民と協働で取り組む上での可能性を探っていききたい。



▶旧・野殿童仙房小学校



▶地域の子どもたちが採取した野生のアケビ

2. 研究活動

各研究分担者が、以下のような問題意識をもって研究に取り組んでいる。

「野殿・童仙房地域と京都大学の協働をめぐって」（児玉）

なぜ地域住民は京都大学とのパートナーシップを望み、また、今後どのような生涯学習的な実践を展開しようと考えているのか。現在、プロジェクトの代表者や両区長へのインタビュー調査を実施しており、今後の両地区での活動の方向性や、地域と大学による協働的实践の可能性を探求したいと考えている。

「童仙房地域におけるIターン生涯学習支援者のライフヒストリー」（太田）

童仙房地域で「学びの空間」づくりに関わる住民には、他地域から移住してきたIターンが多い。彼らの移住してきた経緯と、生まれ育った郷土とは別の地で地域活性化の意味合いをもつ「学びの空間」づくりに関与する動機を、インタビュー調査で探っている。それにより地域再生に関わる一つの示唆を得たい。

「童仙房地域の教育史」（生駒）

童仙房地域は士族授産政策により、明治初頭に初めてひらかれた開拓村である。近世との連続性を持たずに成立した童仙房の村落は、どのような共同体を形成し、その上でどのような教育が行われてきたのか。また、教育を担った人々の足跡はどのようなものだったのか。以上を、村、府との関係だけでなく、近代以降の開拓村の中での位置づけを視野に入れ研究している。

「野殿地域の『寄り合い』に関する研究」（辻）

地域の特色を語る上で、地域住民たちの衆議の内容やそのあり方を把握することは、不可欠な要素であろう。伝統的な野殿地区で引き継がれる「寄り合い」は、歴史的にどのような機能を有し、現在ではどのような意味をもっているのだろうか。これまでインタビュー調査、参与観察を重ねてきており、最終的には衆議の本質に迫ることを目標としている。

（文責：太田 拓紀〔広報担当〕）